

### 【講演内容】

満洲にはいい印象を持っていなかった高碓達之助は、満洲重工業開発(以後満業)副総裁を引き受けるに当たっては平生鈎三郎らに相談し、支持を受けた。高碓と満重総裁の鮎川義介の共通点は、米国を経験した合理主義者である。高碓の満洲での農業構想は関東軍により拒否された。満洲の「統制経済」は、日本国内での財閥に対する反感や岸ら官僚の意向もあり、「天皇制社会主義」的な実験であった。国内の不況をよそに、満洲に巨額な資本を投入した結果、鉱工業生産は4.5倍にもなり、成長率も14~15%にもなった。一業一社をとりまとめた満業は世界でも有数の業績をあげていた。ただ残念なことに資料は破棄されたり秘密にされたりしていた。

高碓の回顧録には「ぼやき」も多々出てくる。満業総裁になった高碓は「満業本社、子会社、関東軍、満洲国政府」の四角関係の調整に尽力するが、関東軍や満洲国政府には、関東軍トップの梅津美治郎や満洲国政府高官(副総理格)の演者の父である古海忠之との信頼関係が大いに高碓を助けている。梅津は平生鈎三郎から「高碓をよろしく助けてやってくれ」と言われていた。1945年8月になって鞍山や奉天が爆撃されて以降、「産業人としての自主性は無く、もはやどうすることもできなくなった」と高碓は語っており、ストレスが非常に強かった。引き揚げについての話は「大連、長春、凶門の三角形を守る」「根こそぎ招集」などの用語や資料にある8月13日の産業懇談会が高碓邸であった、このときに救済総会の話もあり、長春(新京)無血開城(無防備宣言)を政府から関東軍に要請した。また8月14日の「葛根廟事件にも触れられた

### 【質問内容と返答(要約)】

書物『FOR BEGINNERS 満洲国 現代書館』の第一章に、(旧)満洲国には国家の基本要素の1つである国籍法が無かったため「国民」は存在しないとあった。それで「(旧)満洲国生まれの古海氏の戸籍は？」との質問に対して、古海氏は戸籍法を作る時間がなかった・父親の国籍によって決まっていた・の返答であった。このことで、祖国を裏切った漢奸として李香蘭(山口淑子)は助かり、川島芳子(漢名金壁輝)が処刑されたのは、彼女たちの父親の国籍が原因の1つであったことを思い出した。

次に、村上友章(流通科学大学)先生の質問とその意図を私信を元に示す

まず、「古海建一氏の結婚式(1960年12月)での思い出をお話してください」との質問、その意図は、この結婚式が大事だったためであり、それは、高碓が主賓、時の池田勇人総理が仲人を務め、両者が自然に顔を合せることになったからで、この式の直前、高碓は戦後初めて周恩来からの招待を受けて訪中(1960年10月)している。一方、政府は当時の池田政権が安保騒動で傷ついた日米関係の修復を最大の目標としており、対中国政策は明確ではなかった。さらに、高碓を「天衣無縫で何をしてもかすかわからん」と警戒もしていた。したがって、記録を見ても、中国から帰国した高碓は総理には未だ会っていなかった。この結婚式が、高碓の帰国後、初めて両者が顔を合す機会となったのであった。2年後に日中 LT 貿易協定が成立するが、この協定は日本政府の後ろ盾がなければ成立しないものである、この披露宴前の新郎新婦を待つ時間内での高碓と池田の会話が、LT 貿易協定への筋道を付けていったといえるであろう。ちなみに、LT 協定成立前後に高碓の周恩来への働きかけで父忠之氏の早期釈放が決まり、その結果、池田の高碓への信頼は、決定的になったと思われる。

古海氏の答えは、「広間の片隅で、真剣に会話をする池田と高碓を見た。会話の内容は分からなかったが、そこには容易には近づけない雰囲気があった」というものであった。

2つ目の質問は、「高碓が渡満に際し相談した平生鈎三郎(元日本製鉄会長)氏との関係は？」的なものであった。意図は、高碓は平生のことを「奉仕の精神に燃えていた」と高く評価しており、また、平生は関西財界人として古くから高碓と親交があり、高碓からすれば大事にしなければならぬ大物実業家であった。ちなみに、高碓が満洲重工業の副総裁になったのは、この平生の存在、そして小林一三が商工大臣だったこと、さらに岸信介が商工次官だったことが大きいと思われる。当時、高碓はほとんど無名の実業家であったためである。しかし、その後、平生は鉄鋼統制会会長になり、小林一三や鮎川義介と微妙な関係になっていく。しかも、小林一三と岸も大げんかして、両者がともに官を辞すことになる。こうした複雑な人間関係を高碓は巧みに仲介していくのであろう。

以上